

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 24 日現在

機関番号：83101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520839

研究課題名（和文） 災害復興の資源化とコミュニティの創出に関する民俗学的研究

研究課題名（英文） Folkloric study on resourcing the restoration from disaster and creation of communities

研究代表者

陳 玲 (chen ling)

新潟県立歴史博物館・学芸課・研究員

研究者番号：10373474

研究成果の概要（和文）：

本研究では、2006年の新潟県中越地震で全戸全壊という甚大な被害に見舞われた中山間地の山村を対象に、震災復旧、復興のプロセスのなかに帰村選択後の集落再建、被災者の生活再建を当事者の災害復興として捉え、個人、集落、集落間、行政などの関係に注目し、帰村以後の生活再建の中で創出してきた重層的なコミュニティの形成過程を民俗学的に捉え整理した。マクロの震災復興のプロセスを背景としながら、集落及びその周辺の復興プロセスをミクロ的に注目し、人々の思い、選択、葛藤と判断などの展開過程を具体的に記録した。

研究成果の概要（英文）：

The subject area of the study is semimountainous villages where had been severely damaged by the Chuetsu earthquake in 2006. In this study, we have made ethnological considerations on the formation process of multi-layered community created during the restoration of daily lives after villagers' returning to the villages, focusing on the relationships of individuals, settlements and administrations. Placing the macroscopic process of restoration after the earthquake as the background, we paid attention to the microscopic restoration process of the settlements and the suburbs, and recorded concretely peoples' thoughts, selections, conflicts and decisions and also the events occurred.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：災害復興 「帰村」 資源化 コミュニティ 民俗文化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成19年度～22年度の「中越地震後の山古志への「帰村」に関する民俗学的研究」（基盤研究（C）一般）の研究成果を踏まえて着想に至ったものである。当研究の代表者、分担者、協力者は新潟県中越地震後、全村避難した山古志地域を中心に、中でも特に住宅の全壊、道路の崩壊など被害の甚大な6集落（19年4月1日まで避難指示がされていた油夫、梶金、木籠、大久保、池谷、檜木）の3年間にわたる仮設住宅での生活の実態を対象に、行政などの対応も注目しながら、仮設住宅に暮らす住民の日ごろの震災復旧、復興活動に直接に日常的にかかわりを持ちつつフィールドワークを実施してきた。

2. 研究の目的

本研究は、変動の中にある現代日本の村落社会を対象とし、日本の民俗をもう一度捉えなおそうとすることを意図するものである。自然災害が頻発する現代社会の現実を強く意識しながら、農山村で突発的に発生する破壊的な自然災害からの復旧・復興過程において、民俗が活用され、再生、創造される中で、災害ボランティアなど外部の不特定の個人や団体とのつながりや結びつきに伴って創出される多様で重層的なコミュニティと集落再生とのかかわりの実態を、民俗学的な視点から動態的に捉えることを目的とする。

具体的には、国や行政の対応に注目しつつ、おもに新潟県中越地震及び中越沖地震によって破壊的な被災を受けた農山村地域の事例を中心に調査、比較分析を行い、民俗と災害との相互関係のなかで民俗の特質を明らかにすることで、普遍的な意義を析出し、新たな民俗研究の切り口と方法を獲得し、今後

の日本の民俗文化研究に貢献することを目指すものである。

3. 研究の方法

全村避難から帰村に至るまでの5年間にわたる仮設住宅での人々の生活や帰村後の家や家族、集落の動向に着目し、現地と密接な関わりを持ちながら続けてきた山古志の調査を土台にし、中越地震及びその後発生した中越沖地震で広範囲にわたる被害を受けた農山村地域を視野に入れて、以下の問題を把握しながら、事例を収集分析し、普遍的意味を析出し追求していく。

(1) 民俗社会における「個人」の役割について注目し、災害発生後の集落再建、コミュニティの創出という現実の中で考察することである。この時期における区長の意志がその後の集落再建に大きく左右すると予想する。本研究では、その実態を民俗学的に把握・記録し究明していく。

(2) 災害復興という状況の中で、集落再建を、離村者及び震災を契機に外部の個人や不特定の団体、他の近隣地域との関わりによって形成されてきた多様で重層的なコミュニティと関連付けて事例を蓄積し、基礎的な資料を構築し、民俗誌を作成することである。

(3) 集落再建を行政や中間的な福祉的支援団体とのかかわりも視野に入れて考察することである。中間的な福祉的支援団体としては、仮設住宅の際住民と深いかかわりをもつボランティアセンター（現在各地に設置されるサテライト）が、帰村後も、行政と住民とのあいだにあるパイプ役として、地域全体の震災復興を課題として取り組んでいる。サテライトを拠点とする震災復興の諸活動を、

集落再生と関連付けて記録する。

(4) 中越地震に続く中越沖地震における災害復興と集落再建の問題を比較考察することである。中越沖地震も震源地に近い農山村地帯が最も大きな被害を受けてきたことが特徴である。震災を契機に、ボランティアなど外部とのつながりで形成されたコミュニティが重要視され、それぞれの地域がもつ具体的な条件に応じた地域復興の様々な計画プランが創り上げられてきた。集落を再建するか、廃村するかを含め様々なケースが現に見られる。これらを比較し、分析・考察する必要があると考えている。これらは、震災後の集落再生や廃村の事例を蓄積し、普遍性を見出すために大変重要で必要不可欠な事例であることを認識しているからである。

4. 研究成果

本研究では、集落を考察の単位とした。これは、行政の管理する末端、また、国の政策、震災後の復旧復興の過程において、集落を単位として意思確認が行われてきたことと、住民側が個人の帰村意志が固められるなか、各自元の集落に自明的に帰属意識をもち、復旧、復興の活動を取り組んできたためである。

また、中山間地に位置する6集落を考察対象にする場合、集落ごとに見られた歴史的条件、立地条件、集落の個性、などの状況の相異を確認し、状況に応じてより適切な方法を獲得し接近するように試みた。それは、コミュニティの創出のあり方に直接に影響を与えるからである。

上述の状況を前提に認識しながら、以下のことを明らかにすることができた。

(1) 「個人」とコミュニティの意思形成、そのあり方と集落再建と関連付けて考察した。集落のキーパーソン的な人物に注目し、その意思、判断と具体的な計画がどのように

コミュニティの集合知として形成したのか、あるいは、相互にどのような葛藤が生じたか、合意達成した場合、どのような方法を取り、どのような仕掛けを利用したのか、を明らかにした。また、キーパーソン的な人物の有無、集落の役員構成、区長の意志、思い、任期のあり方が集落のあり方や方向性へと規定するような働きをもっているといえる。

(2) 地理的に孤立した木籠集落をフィールドに、準区民、山古志木籠ふるさと会の成立とその組織、活動の実態を調査し、参加型の集落支援組織の特徴を整理した。そこでは、都市民的嗜好へ対応し、集落の生活や震災の経験を資源として活用している状況を確認することができた。これに対して、池谷、檜木、大久保の3集落からなる三ヶ地区を中心に、集落間を単位としてコミュニティの創出に注目し、集落間の関わりと集落外の第三者の働きを把握した。三ヶ地区合同盆踊りと合同サイノカミの形成過程を通じて、集落間の相互関係は、協力の反面に、利益的衝突などからなる対抗性の一面を確認することができた。この協力と対立の相互関係が歴史的に存在し、今でも一貫しているその実態を確認することができた。また、震災復興支援センターという第三者による緩やかな働きによって、集落と集落との微妙な対抗的な一面が解消され、集落間をつなぐ一歩を踏み出したことが明らかになった。

(3) 地震後集落内に見られる景観形成と変動を生活再建と集落再建の表れとし、震災後新たに形成された景観のあり方と集落再建と関連付けて考察した。池谷集落では、主に集落センターの新築場所の選定と中心的場の形成のあり方を報告した。集落景観は、生活空間の再生のみでは認識しきれなくなったこと事例を蓄積した。また、集落移転した檜木集落では、「天空の郷」を拠点とする

居住地と元屋敷を拠点とする生業地との間に見られる顕著な分離現象を明らかにした。同じく集落移転した木籠集落の、中越地震の被災による水没家屋を見守る動きや、それを活用した「記憶」の場としての役割を概観した。水没家屋をとおしてコミュニティの場を創設しようとする集落内部の力と、それに呼応する集落外部から参加する人々が集落の復興や被災家屋をとおして交流を進めている実態を報告した。

(4)、中越地震に続く中越沖地震における災害復興と集落再生の問題を比較、考察した。中越沖地震で被害を受けた柏崎市宮川町内会を調査地とし、災害によって形成された「空き地」という新しい景観から町内の変化と復興の様相を検討した。災害復興と景観形成について、今後一層深めていく必要があると考える。

以上の復興をめぐる動きは、震災による全戸全壊という崩壊的な状況のなかで取り組んできたものであり、今後引き続き模索していくであろうものと理解している。今後も引き続き追及し、更なる成果を獲得する必要があると思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

中野 泰 「震災における村落社会の動態と重層的コミュニティの顕現—山古志地域における「集落再生」事例の民俗学的研究—」『日本学』東国大学校文化学術院日本学研究所 査読無 30号 2010年 245～276頁

[学会発表] (計7件)

陳 玲 (代表) 「中越地震後、池谷集落再建の現状についての中間報告」新潟県立歴史博物館 2010年5月8日

陳 玲 「震災と山小屋—山古志の震災全壊

地域を中心に」新潟県立歴史博物館 2010年9月11日

谷口 陽子 「「避難指示」解除後の三宅島—2010年3月の予備調査の報告」新潟県立歴史博物館 2010年9月11日

森 行人 「震災復興におけるの景観について」新潟県立歴史博物館 2010年9月11日

岩野 邦康 「「資源化」という概念をめぐって—多様な当事者性とそれぞれの資源」新潟県立歴史博物館 2011年9月26日

陳 玲 「山古志の「帰村」と災害復興を「コミュニティ」論でどう捉えればよいのか？」新潟県立歴史博物館 2011年11月26日

谷口 陽子 Re-establishing Social Relations and Personal Space: A Case Study of the Post-Disaster Resettlement Experience in Rural Japan 2011 Annual Meeting of American Folklore Society 米国インディアナ大 2011年10月15日

[図書] (計2件)

飯島 康夫 原直史・池田哲夫・長岡市立中央図書館文書資料館「山古志の民俗資料整理と養蚕・製糸具の特徴」『山古志の文書と民具』2012 140～142頁

研究代表者 陳 玲 新潟県立歴史博物館『災害復興の資源化とコミュニティの創出に関する民俗学的研究』平成22～24年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「災害復興の資源化とコミュニティの創出に関する民俗学的研究」研究成果報告書 2013 総86頁

陳 玲 「池谷集落及びその周辺地区におけるコミュニティの創出について—一個人・集落・集落間・震災復興・行政等の相互関係作用から—」『同上』9～28頁

池田 哲夫 「被災民家の見守りと地域再生」『同上』29～36頁

飯島 康夫 「復興資源としての博物館民俗資料」『同上』37～44頁

中野 泰 「被災集落の資源化とその意味—木籠準区民の会からふるさと会へ—」『同上』45～66頁

岩野 邦康 「災害の「資源化」をめぐって—災害をめぐる多様な当事者性とそれぞれ

の資源一」『同上』67～74頁

森 行人 「災害復興と「資源」の用例に関する考察」『同上』75～80頁

三井田 忠明 「「空き地」のある景観から一中越沖地震後の柏崎市宮川町内会の場合一」『同上』81～86頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

陳 玲 (chen ling)
新潟県立歴史博物館・学芸課・研究員
研究者番号：10373474

(2) 研究分担者

池田 哲夫 (ikeda tetuo)
新潟大学・人文社会教育科学系・教授
研究者番号：50313490

飯島 康夫 (iijima yasuo)
新潟大学・人文社会教育科学系・教授
研究者番号：20313489

中野 泰 (nakano yasushi)
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：20323222

平成24年度研究分担者
田辺 幹 (tanabe motoki)
新潟県立歴史博物館・学芸課・研究員
研究者番号：50373478

(3) 研究協力者

岩野 邦康 (iwano kuniyasu)
新潟市歴史博物館学芸員

森行人 (mori yukihito)
新潟市歴史博物館学芸員

三井田 忠明 (miida tadaaki)
新潟産業大学非常勤講師

谷口 陽子 (taniguchi youko)
専修大学 非常勤講師